特別
読み切り

日本へ儒教を伝えた姜沆（カンハン）

―怨讐を越えて、いま友好の輪が―

村上　恒夫

姜沆画像（霊光内山書院蔵）

大洲城跡

今から約四百年の昔、戦国の乱世を統一した豊臣秀吉は、その晩年、個人的な野望から隣国朝鮮を侵略した。文禄元年（一五九二）四月、釜山（プサン）に上陸した日本軍は、わずか二十日にして首都漢城（ハンソン）（現・ソウル）を落とした。

やがて、朝鮮を支援する中国明（ミン）軍の参戦や、義民軍の蜂起などにより戦いはこう着状態となり、日本は一旦兵を引いた。しかしその後の和平交渉は決裂、慶長二年（一五九七）二月、再度の侵略となった。

当時伊予州（現・愛媛県）大津（現・大洲）地方を藤堂高虎が支配していた。命を受けた高虎は、六月十九日、三千の兵を率いて長浜を出港し、朝鮮の南方の海上を荒らした。そして九月二十三日朝、全羅道（チョルラドウ）霊光（ヨンガン）の沖の海上で、船に乗る朝鮮人の一族を捕虜にした。その中に姜沆（カンハン）という儒学者があった。

姜沆（一五六七―一六一八）は代々高名な儒学者の家に生まれ、二十九歳で博士となり、官職を歴任していた。しかし日本から襲いかかる風雲の嵐は、彼に平穏な学究の生活を許さなかった。乞われて全羅道の南原（ナモン）城に入り、軍糧の運搬に当たっていた。

八月、宇喜多秀家の率いる日本軍の

金山出石寺

猛攻の前に、南原城は落城した。南の湖南（ホナム）地方で軍糧の調達をしていた姜沆は、南原城が落ちたのを知り、一族とともに李舜臣（イスンシン）が率いる朝鮮水軍に合流しようと霊光を出、海上で藤堂軍と遭遇した。

姜沆が書き残した日本での幽囚の記録『看羊録』によると、捕われるとき、姜沆は目の前で幼い我が子二人が溺死するのを見ている。一族の中の女の一人は、乱打された挙げ句（く）餓死した。九日間水も食糧も与えられず、ひもじさに耐えられなかった八歳の男の子は、海水を飲んで病気になり、海に放り投げられて死んでいる。恐ろしい阿鼻叫喚（あびきょうかん）の地獄絵図である。

そして生き残った十数名は、対馬・壱岐・北九州・下関・上関を経て、十月中旬頃、伊予州の長浜に着いた。一行は陸に上がり大津へ連行されるが、「困苦甚だしく十歩に九転する」（『看羊録』）有様であった。そして途中の肱川を渡るとき、流れの中ほどで転倒してしまった。数珠つなぎにされている一行は立ち上がることができない。下流には深い淵が待っている。

そのとき、岸の上にいる一人の農夫が走って来て溺れる一族を岸に引き上げ、家から稷糠（たかきびの雑炊）と茶を与えた。姜沆は、「倭人の中にもかくも至誠の人があるのか」と書き残している。

こうして大津城に幽閉された一族は、翌年八月まで約一年間を過ごすが、その間に二つの特記すべきことがある。姜沆の脱走と金山出石寺の僧、快慶との交遊である。

慶長三年（一五九八）五月二十五日、何としても朝鮮に帰りたい姜沆は、夜陰に乗じ、二人の朝鮮人とともに大津城を脱走した。南に向かい板島（現・宇和島）まで逃げたが捕らえられ、危うく斬殺されそうになったが、「一人の倭人が剣を抜いてこれを阻止し」（『看羊録』）辛くも命をとりとめている。

姜沆顕彰碑を訪ねた子孫たち

標高八一二メートルの山頂にある金山出石寺の僧快慶は、姜沆の学識を知り温かくもてなした。その求めに応じ、姜沆は扇子に漢詩を書いて与えている。また、大津城下の老僧とも漢詩の交換をしている。

その年の八月、姜沆一族は大津から京都へ移された。すでに秀吉は死に、日本と朝鮮の関係は変わろうとしていた。伏見の藤堂屋敷に幽閉されながらも、かなり自由に市中を歩くことができた。そして姜沆は相国寺の僧、藤原惺窩を知る。この出合いこそは、その後の日本の教育・文化の発展を決定づけることになった。

藤原惺窩（一五六一―一六一九）は姜沆の学識を知ると、自分よりも年下、そして捕虜の身の前に賓師の礼を尽くして教えを乞う。その態度に姜沆の心は動いた。そして日本に儒教を伝えるのである。

慶長五年（一六〇〇）四月、姜沆たちは許されて、故国朝鮮へ帰った。

それから約四百年の歳月が流れた。一九九〇年三月、大洲城の一角に記念碑が建てられた。表には「鴻儒姜沆顕彰碑」とあり、裏には、姜沆が出石寺で詠んだ詩が刻まれている。

翌年四月、桝田大洲市長は市民の代表とともに韓国全羅南道の霊光を訪ね、四世紀前の大洲城主による侵略を謝罪し、儒学者姜沆を橋わたしとする、日韓両国の友好・親善を呼びかけた。以来、双方の交流が続いている。

秀吉は武器をもって、隣国朝鮮にぬぐうことのできない忌わしい足跡を残した。姜沆は捕われの身でありながら、学問をもって、日本に輝かしい偉大なる足跡を残した。

むらかみ・つねお　一九三四年大洲市生まれ。元大洲市役所職員。現在愛媛県生涯学習推進講師、大洲市文化財保護審議委員、愛媛龍馬会顧問。『坂本龍馬脱藩の道を探る』『姜沆・儒教を伝えた虜囚の足跡』などを発表。シーボルト研究にのめり込み、『イネさんのこと』（仮題）を執筆中。